



コロナ禍でSDGsと向かい合う

今年度、本校は2年生の野外活動を10月に実施しました。活動場所は、県立観音山少年自然の家。御存知の通り、自然豊かな立地の宿泊活動施設で、登山や沢登りなど、山や溪流を舞台に心身を鍛えます。さらに、豊かな自然を守ることを目的に、いわゆる不便な生活を送ることをも体験します。

一方、今年は新型コロナウイルス感染対策として、食事はすべて個別に梱包された弁当、湯茶提供はペットボトル対応としました。毎食事、活動ごとにペットボトルで飲料水を提供し、ここで発生するごみを入れるための大きなビニル袋は、すぐ一杯になりました。自然保護のために節電・節水を呼び掛ける一方で、大量のごみが発生する現状を前に、コロナ禍を生きる子供たちは、どのような感情でこの光景をながめていたのでしょうか。

学校現場では、「学びを止めない」のもと価値ある教育活動はできるだけ継続したいと考え、知恵を出し、対応を工夫しています。例えば野外活動を実施するためには、これまでなら良しとされてきた「環境にやさしい行動」が、感染対策となるとNGとなることが多く、この点からも、これまでと同じ活動目的ではそぐわないことは明白です。であるなら、「矛盾」を直面する子供たちに、そこからどんな課題を見つけさせるのか、重要な学びのチャンスとしたいものです。

生活の営みに係る見方・考え方を鍛える教育活動計画を

SDGsをテーマとした学習（家庭科授業とは限らず）を進める時、子供たちは、持続可能な社会を実現するための行動目標を安直に立てる傾向があるのは、先生方も常に感じていることと思います。持続可能な社会を実現するためには、先人が考え出した便利さや合理的な行動が足かせになる状況が多く、そのため、不便を強いてでも人々は取り組まねばならぬ事態があること等々、多面的・多角的に状況を想像できる力が、これからを生きる子供たちには必要となります。今回のようなコロナ対応に関わる野外活動の事例は、本校に限らず、また、日常生活でもよくあることでしょう。本校の2年生には、野外活動の振り返りと共に、SDGsを達成することの難しさや、つじつまの合わない、合わせにくい現状について、生徒の視点で話し合う機会を作ってほしいと思っています。

以上から、家庭科、技術・家庭科の視点（生活の営みに係る見方・考え方）で野外活動（自然体験活動等）や修学旅行の活動プランを立ててみると、たいへん興味深い学びができるのではないのでしょうか。これはSDGsに限りません。学年団に所属されている先生は、「健康・快適・安全」や、「生活文化の継承・創造」、「持続可能な社会の構築」などの視点について、ぜひ、ご自身が任された分掌で、家庭的な見方・考え方が鍛えられるプランを立てることにチャレンジしてみてください。これこそまさに、予想困難な未来を生き抜くために必要となる力が養われることと思います。 新津中学校長 平野 敦子

3、4部会の実践紹介

可美小 6年「できることを増やしてクッキング」

野菜の特徴によって、加熱の仕方が違うことから、野菜の切り方や加熱の仕方を考えて3種類の野菜を入れ、コロナ禍への対応とタブレット撮影による効果を考えて野菜炒めの実践を行った。

○手指消毒後に身支度をし、野菜を切る際はゴム手袋の着用を行った。

○各班4人構成、2人一組で一人一人自分の分は自分で調理し、もう一人は実習の様子をタブレット端末で撮影をした。

○出来上がった料理は各自容器に入れ、教室で試食した。



〈ペアの児童が撮影
野菜による切り方の違い〉

【成果】

- ・全員が一人で、切る・炒める等の一通りの調理過程を体験することができた。
- ・タブレットで互いの調理実習を撮影することで、撮影者は野菜による切り方の違いを確認することができ、実習者は自分自身の切り方について振り返ることができた。また、教師もオクリンクで提出された映像で一人一人について確実に評価することができた。

(文責：伊藤昌代)

豊西小 6年「生活を豊かにソーイング」

手縫いやミシン縫いの学習を生かして、トートバッグの製作を行った。限られた授業時数の中で、よりきめ細かな指導ができるように、以下の実践を行った。

(1) ミシンボランティアの活用

学年だよりを通してボランティアの募集を行い、計8名の協力を得ることができた。上糸をかける、下糸を出すなどの基本的な操作に時間がかかったり、ミシン縫いが上手いかなかったりする児童の補助をしていただいた。

(2) 教科書に掲載されているQRコードの活用

学級や実施日時によってボランティアの参加者数にばらつきがあり、手薄になってしまう時間もあった。そのため、タブレットを使って教科書のQRコードを読み込み、ミシンの基本的な操作が分かる動画を視聴しながら製作することができるようにした。繰り返し再生したり、動画を止めたりして、一つずつ確認しながら進めていく姿が見られた。

(3) ペア活動の充実

二人で1台のミシンを使って交代で製作を行った。教え合ったり、出来上がりを確認したりしながら製作を進めるよう指導した。

【成果】

子供たちの様々なつまずきに対して、ボランティアの方々が丁寧に教えてくださったり、子供たち同士で教え合ったりする体制が整っていたことで、限られた授業時数の中で活動することができた。安心して学習に取り組む子供たちの姿を見ることができた。

(文責：加藤沙弥)



5、6部会の実践紹介

舞阪小 6年「できることを増やしてクッキング」

子供たちが元気に学習や運動に取り組むためには、朝食をきちんと食べることが大切である。そこで、子供たち自身が自分の朝食を見直し、栄養のバランスも考えた食事を心掛けることができるよう学習を計画した。また、栄養教諭と連携して学習を進めることで、専門知識や技能を生かしてより具体的に子供たちに支援をすることにした。

○子供たちが食べてきた朝食を振り返って5つの食品群に分類したり、朝食の効果について説明したりすることを通して、栄養バランスについて考えさせた。

○「青菜を炒める」学習では、栄養教諭の示範をタブレットで撮影した。手元の様子など細かいところも分かりやすくし、子供たちが実習を行う際に参考になるようにした。

○炒め物の実習を各家庭で行うこととし、調理計画を個別に作成させた。材料の分量や調理の手順など、栄養教諭の専門性を生かして具体的に支援した。

○朝食について栄養バランスを考えたメニューを考え、今後どのようなことに心掛けたらよいか具体的に考えさせた。



〈朝食の効果について説明〉

【成果】

栄養教諭と協力して学習を行うことで、栄養教諭のもつ専門的な知識や技能を生かしたアドバイスをすることができ、子供たちは、炒め物の調理の仕方について理解を深めることができた。また、自分の朝食について問題点を見つけることから学習を始めたことで、炒め物の実習やバランスのよい食事の学習に主体的に取り組むことができた。

(文責：染葉夕紀江)

雄踏小 6年「こんだてを工夫して」～給食1食分の献立を考えよう～

献立を構成する要素を理解し、調和のとれた1食分の献立について考えた。食生活をよりよくしようと主体的に取り組んだり、よりよい献立になるよう仲間と工夫したりした。

○献立を構成する要素がわかり1食分の献立作成の方法について理解した。

○栄養バランス、彩り、味のバランスなども考えた。

○友達と話し合いながら考えることで、よりよい献立を見つけようとした。

○給食では旬や地場産物の食材を中心に献立が組み立てられていることを知り、地場産物への関心を高めた。

○浜松産の米を取り上げ、ご飯を主食に考えた。



【成果】

主食、主菜、副菜のバランスが取れている献立を、旬の素材や地場産物を取り上げて考えることができた。また献立を構成する要素を理解し、1食分の献立を班で話し合っ

て献立を立てる際にどのような工夫が必要かまとめることができた。(文責：家本久美)

【編集後記】

今回も、さまざまな授業実践を紹介していただきました。特に、家庭科の授業の中でICTを活用する事例が数多くありました。各学校の実践を参考にし、学習を深めるツールとして、日常的にICTを活用していけるといいなと思いました。

まど担当 原田 佳代子